

時間差

小宮隆弘

玄関のチャイムが鳴る
内施錠をゆっくりまわす
開けた扉の外に
うなだれてたつ娘の顔を
なぐりつける――

ブロック塀の角を曲ったとき
わが家の玄関灯にうつる女の影があった
その時間差一分たらず
タクシーで帰ったものと
通勤バスの時刻表の差で
娘はこたつ布団にぬくもりをもとめていた

男と女の愛情
好き合つて裸で抱きあうのを
親はとやかくいいなさんな

寛容な態度

若い人たちのよき理解者

やさしい父親は

ひとの子に であつた

妻のいるお医者先生と同居

未婚の母になる と

電話の予告どおり東京から帰郷した

髪の毛の乱れない

端正な

美しいといえるわが娘

暖冬の気温

うしろへうしろへ追いやられてきた

立春の異状寒波

足くびにあたる赤い熱線

電気こたつのかたい天板の上

青ざめてのせたわたしのこぶしを

妻の両手がじつとおさえつけている

謀る

緒方宗平

あるとき
見知らぬ二人づれの男がやってきて
近所の若者のことを
ねほり、はほり
訊いた。

たとえば
手くせはどうだ
金づかいはどうだ。

おとなしく真面目な若者の
見当ちがいの
ことばかりである
ところで
あなたの名前と
お年をどうぞ。

おかしい
とはおもっていたのだ。

彼岸花

雑木がしげり

茨がからみあつている。

台風に倒れたタブの大木。

熊笹をふみわけていく道に

イノコヅチの小さな妻が

腰までくつつく。

広い屋敷あと。

日がさしこみ

藪の切れ目にでると

小さな碑があつた。

訪ねる人もないらしく

供花のあともなかった。

百姓をしながら

書きつづけた詩。

その明日をいつともしらず。

花もわたしを知らない、と

深く刻まれた詩碑。

彼岸花を手折って供えた

中野鈴子の

そのまえにたたずむ。

1980. 3. 22

(福井県丸岡町に住む人の手紙から) 1979. 9. 22

海に流れた紙

河合俊郎

静かに暮れる砂浜の岩陰に 焚火の煙がうずまく 炎に照り映えた顔がゆがみ もう魚を採るのはやめや と 笑うフミオさの奥の金歯がきらりと光る 道路工夫あがりの中年男と 向かい合つてうづくまる私は高令失業者 二人を残して海が暮れてゆく

フミオさの話で焚火はパチパチはぜる あの日からな 船を揚げながらかけ声もでない仲間たちは黙りこくつて ものも言わない 変だと思つたぜ まるで隣の国の ほんら 戒厳令みたいなのに 砂にのめりこんだ足も洗わず 濡れた股引のまま争つて家へ逃げ帰る 誰がスパイかわからんでな

事のおこりはこうだ あんまり組会長がひどいことす つから みんなで首のすげ変え署名を集めたのだ 三月が終らんうちにの イワサ組合長を正義の味方ニツケイサに交代してもらおう これ以上のピンハネはかなわん 千円の水揚げで四百円の組合費ちゆうことがある か みんな焚火を囲んで相談した

毎日署名はふえたよ プリキ屋のトシコウも 後家さのミツチャンも ダンプのヒロまで書いてくれたの 村中の若い衆もジジもババも みんな賛成だ えらいさんは首だ ピンハネ反村 酒買つてこい 悪口雑言 怒りは歌声になつて爆発した。

ところがの 夜中にテープコーダーちゆうもんが組合長の家へ持込まれたの 親分の怒つたこと怒つたこと この声はロクスケだな これはイチコウ ううむちきしよう イワサ組合長はゴム長はいて走りだした 深夜の海風は冷たかつたらあな

親父はおるか親父をだせ 留守だと嘘つけ おめえはニツケイさのおつかあずら イワサが来たと言つとけ 素つ首もらいに来たとな 留守番の愛さんはびつくり仰天 何も知らんのおろおろ縁板に這いつくばり 頭をこすりつけて すみません言います 言います

イワサ組合長の黒いセドリツクが白煙をすこし残して 貝がらをびしびし踏みつぶしながら 石路の道を通つた みんなの沈黙はその翌日からはじまつた 署名簿はこまかくちぎられて海へ流された 暮れてゆく波をみつめながら 私も フミオさも黙っている 焚火の煙が眼にしる (一九八〇・四・三〇)

小さな眇

— M の日常

和田英子

《運搬》

使いなれたズック靴を下げる M
雨の降る日は
ゴム引き合羽
飛脚人のいでたちで
汗のふき出る頃は
安全帽にブルーの錆
炎天下の農夫然と
タオルを首にまき
毎日 現場から通つてくる

《伝達》

小さな眇 訥弁
ハイこれ と封筒をおき
愛想わらいをつくる
ふりむくと
風むきが海よりの風になつた
もう春だ
抑揚のとりにくい調子で
せきこんで言う
政局批判をときに披歴するが
不用建築のビルの階段が欠け
ケモノ道にさまよう旅人の
遠いこだまだ

《標的》

ウチにはテンノウが二人いるからな
同僚の皮肉と冗談まじりの中を
すりぬけ
蛭の感覚を發揮して
若い娘には
誰彼なく身をのり出して話しこむ
なにを話題に選ぶのか
娘たちはいちように
うつむき
ななめに避け
上目づかいに異形のひとと応待する
玄関の受付嬢は
最大の標的である

《事故再現》

晴れた昼休みの一とき
四十料で走つてきた車が
横からとび出した自転車をはね
Mの前で急停車する
見物人を仕切るロープに自転車は横転し
人形が道路の真中にふつとんだ
見聞き まばたく眇
後頭部に収斂された
いやな記憶
保安要員が埃をはらつて
次の動作に整える
交通公園から来た人形は

九死のあとの
満身創痍だ

《名刺》

Mがロツカーのかけで
病身のSを呼び
名刺の印刷をたのんでる
息子の結婚式に使うのだが
会社名を入れるとき
上の一字と中の一字を省き
A重工業(株)
B工業(株)としてほしい
会社の名を名乗ることは
分不相応で
おこがましい
遠慮したい
というのだ
あんたは悪いことをしたか
恥じることはない
みんなちゃんとした社員じゃないか
もつれる口調で
Sが説得し同意を促す

《帰路》

もつれた文字をつなぎ合せ
日焼けの顔で
酒気を帯び
退社の人ごみに
さからう M

さようならの挨拶

宮田 正平

生マレテ来タトキ
裸デ独リダツタ
コノ世ノ舞台ヲ下手ニ消エルトキモ
独リデ裸ダ

サヨウナラニ儀式ハイラヌ
墓モイラヌ 碑モイラヌ
危篤ノ電報モ通夜モ告別式モ葬儀モ
イツサイ無用
肉モ臓物モ骨モ爪モ毛モ
アマスナク焼キツクセ
ソノ灰ヲ 暮夜ヒソカニ
鳴門ノ渦ニ撒ケ
ユメユメ 閻魔ノ手ニナド

渡シテハナラヌ

○ 読ミカケノ本ヲ机ニ伏セタママ

書キカケノ手紙ノ硯ノ蓋ヲアケタママ

夏休ミモ終リニ近イ生徒ノヨウニ

残リノ宿題ガ山トアル

サヨウナラハマダダ

タダヒタスラニ

生キ急ガネバナラヌ

峠ヲ越エテ坂道ヲ

麓メザシテ転ガリ落チルゴト

生キ急ガネバナラヌ

来タラ言エ

閻魔ノ使者ニ言エ

オラヌ ト

千年タツタラ来イ

ト 言エ

呂運亨を語った男に

寺島 珠雄

あれから
お前と三度は逢つたろう。
逢うたびに
話はゴリへ行った。
ゴリで喫つたタンベに行った。
黙りこんでやがて笑つた。
最後はこのビルができてまもなくだった。

もちろん覚えていられるお前の名を
おれは書かない。
書かないと思ひ深まるようであり
書かないと不燃焼なようであり
どっちにしてもようであるまでの物足らなさを
物足らぬことで味わっている。

北、南。往反して幾度

結局ニッポントキョー一九五×年

お前はおれとゴリの秘法を伝授し合った。

窓越し格子越し

お前がほかにしゃべるのはいつも呂運亨。

呂運亨。

コーベ。このビルの蔭

地底配管のようなバラックでもそうだった。

そしていまはポートピア'81の前の年さ。

脚というか柱というか

新交通システムなるもののコンクリート大円筒がぶつ

立って

バラックはない。

このクニが持てという許可証を

お前は持ち歩いているか。

よ。

名を書かぬお前。

註 ●ゴリ＝古典的発火法の変型 ●タンベ＝たばこ

●呂運亨＝一九四七年七月暗殺された韓国の政治家

機関車

近藤 計三

一雑ぎってやつだ。
凍てた路は深閑として
人影もない。
もう陽も照っている。
おかしな世の中になったな。
暖冬異変の
珍らしい解けた雪ぬかるみを
俺は友人Tと連れだっている。
樹木名には弱いんだ。
樅や杉ならわかる。
葉緑樹の針葉を透かして
頬をあらめたこどもの機関士が
手を振っているのを俺は眺めた。
D51かな。
いやC50というのかなあ。
Cが大三輪でDが大四輪だったかなあ。
まっくらい機関車が
赤・青の彩色まぶしい円筒客車を

三輪ぼっち牽引している。
ずり落ちそうに屋根へ跨ったのやら
客車を飛び渉るものもある。
いまきつと銀河鉄道でまっしぐら
大宇宙への驀進なのだ。
ブランコの国。
シーソーや鉄棒の国……。
そんな夢の国々を通過して
未知の花を摘みながら喚声あげているが
いつかはこどもたちもまた
おとなの現実の世界に帰ってくる。
此処は区役所跡地の公園で
俺の戸籍もがっちり管理されていた筈だ。
コンクリート円筒型の機関車にしがみついで
ひとしきり出発進行の甲高い掛声が
呼笛の鋭さで伝わってくる。
蒸気機関車の好きな小野十三郎はいつも
たぶんこいつに乗車して
阿倍野区阪南町の自宅から出掛けてくるのだろう。
きょうは在宅で
これから俺とTが訪ねていく約束だから
まだ乗ってはいまい。
一足先きに俺たちが乗っかって
帰るとするか。

青い光の中で

高島 洋

青い光

あの青い光のなかにいたとき
銅、鉛を溶解したときのようなにおいがした
口のなかに苦い金属性の味がのこった
しばらくして下痢を訴える者がいた
眼やまぶたがあかくはれ、のどがひりひり痛むと言う者
も出た
額や手足のヒフが日やけたようにくろずんでいる者も
目立った。
が、いつしか忘れられていった。

鳥

あのとき目の前の鳥が急に力を失って墜落するのを見た
雀が草むらからとび立てなくなり、びくびくつと小さい
体をふるわせると、ころがった
鳩がななめにおちてきて乗用車のフロントガラスにぶつ
かった

家畜

スリーマイルで原発が稼働しはじめたのは一九七四年
である。一九七六年ごろから牛のうしろ足のマヒや、い

つまでたつても成長しない小牛が続出した。アヒルの卵
が一〇〇個のうち一〇個より孵化しなくなった。住民た
ちは役所に陳情したが診断書を提出せよという。獣医た
ちはどう記述してよいかわからぬと頭をかかえた。

樹木

事故から四ヶ月、八月だというのにまだいくつかの樹の
葉はみどりを失っていた。
落葉したまま、骸骨のような枝に黄色い葉をまばらに残
していた。
よくみるとその枝の先端に何かがびっしりくっついてい
る。
それは小さいみどり色の若葉の芽が懸命に萌えはじめて
いるのだった。

おののき

青い光をあびてから八ヶ月乃至十ヶ月程してスリーマ
イルでは、赤ん坊がつづいて死亡するという事件が起き
た。新聞の発表によると牛乳に含まれた沃素剤のためで
あるかもしれないとつたえた。住民たちは、いまはおの
れの体調のわずかな変異にも注意深くおののく。

宮殿

北本哲三

磨きぬかれた床に絨氈が敷かれ
そのまま
緩やかな階段へとつづく
ぞろぞろぞろぞろ
それを上げる
足音もたたく
空殿とはこういうものか
広い部屋
荘厳といえば荘厳
豪華なシャンデリアがさがり
金色や銀色がきらめく
それでも
なぜか暗いのだ
暗さが 素肌をこすって流れるみたい
仲間は六四五人というが
参加しないのもいて
結局六〇〇人前後か
それが 四列の
コの字型に並ぶ
ちよつとしたどよめき
今頃 四列の
内側の列に立とうと
他人をかき分けるやつがいて
暗さを一層暗くして

ゲート・ボール

押切順三

この干陸地一万五〇〇〇ヘクタールの
ぐるりとまわりは、
承水路とか残存湖とかで、
流れがあるのか、ないのか
平らな春の水だ。
その水を渡るに、
東西南北に七本の橋がある。
堰堤に高く架けられた橋を渡る。
八郎瀉という町の橋から、
私は、この陸地にはいる。
巨大な浮ドックの、
繋ぎ綱みたいな橋だ。
海抜〇メートルの平坦な道、
中央幹線排水路に架けられた
“みゆき橋”というのを渡って
中心地に近づく。
ゲート・ボールの団のなかで、
手を振ったのが彼であった。
“お元気で、
”としよりは、まあ こんなことで、
幹線道路を、スポーツカーが走る。

隊列のコの字に向って設けられた台座
老いて、小柄なそのヒトは
台座に上がる階段の一つ一つを
二足づつで昇ってくる
やがて
とぎれとぎれの短かいおコトバ
そのおコトバが終ると
みんなが最敬礼
そのヒトは再び 慎重に
一つの階段を 二足づつ踏んで
ご退出
やれやれの気持で
ご殿から抜けて庭へ
ぞろぞろぞろぞろ
もはや隊列などない気軽さ
明るい初夏の風に深呼吸
新緑の苑がまぶしく光り
手入れの行き届いた植木の連なり
それらを圧するように
鉄のあととも鮮やかな鶴と亀
大きな羽で
翔びたつか濃緑の鶴
十幾畳の広い甲羅で
のこのこ這い出すか
新緑の亀よ
振り向けば 押しかぶさってくる
暗く 荘厳な 宮殿の棟棟

(一九八〇・五・二)

それが陽炎のなかで浮く。

「日がな一日、こんなことで、
モデル農村というものなんだ、
なにもかも、ゆらゆらゆれてる。
カントリーのタワーも、センターベルトも、
てかてか光って、陽炎のなかでゆれてる。」

「俘囚というのか、ここでのとしよりは、
彼は、カジュアルシューズに照れて
ちよつと笑った。
船か、繋留されている船か、
浮ドックだとしたら、

このへん、まるでデッキ（甲板）の上だ。

木の温みのあるやさしいボールだ、
それが
ゲートめがけて重く走る。
「見せ場の、あそびをしているみたいだな、
ほれ、ころべ
第一ゲートまでボールを追いこむ
むぎわら帽子にスカーフ。
「つまりは、米づくりの収容船か、

第二ゲートも、第三ゲートも

知るもんか。
思いつきり弾いて、
飛び出してみるか。

一九八〇年春（大瀧村）

私的記録 二題

申 有人

壁

——飛降り自殺した十二歳の少年に

十階マンションの屋上から

青い光の海へ一匹の白い蝶がひらりと沈む

透明な壁にうごめく

異様な影に

おびえ のたうつ白い蝶

級友たちは サークスの客席から

「カベ」と連呼して歓声をあげる

教えて！

——ぼくが来るとなせきみたちは眼と眼で話をするの？

——先生はなぜ ぼくを疫病患者のように見るの？

——父さん教えてよ ほんとうのこと？

十二歳のせつない声が

雑巾のように有刺鉄線にぶら下ったまま

惨事は終わった

スリル満点の演目に

客たちはなごり惜しそうに席を立つ

舗道に碎けた小さな残骸を踏んで

——なぜぼくは朝鮮人なの？

コトバ

——徐勝兄弟の母へ

——祖国とは何んやろか？

ソウルの高圧線に晒らされた

息子たちの心臓と耳に向い

九年間問いつづけた

母は尽きる

——コトバが コトバあつたらね

タラチネは知る

コトバを喪った

乳房の痛みを

コトバの新芽は

タラチネの熱い血を要め

血は流れ 流れ

糜爛したコトバに

涸れつきた乳首をふくませ

母は しじまの中に

カササギの鮮烈な声を聴こうとする

(80・4・30)